

2

「東京大学本郷キャンパスの計画とキャンパス計画室の役割」

西村 幸夫

『東京大学本郷キャンパス』の出版経緯

○西村 西村幸夫です。2011年から2016年までキャンパス計画室長を務めておりました。このキャンパス計画室というのは、月に一回集まって、東京大学キャンパスの基本構想から細かいデザインまでを議論する会議でして、文系の先生にも参加していただいています。

キャンパス計画室で議論を重ねる中で、現実の建物をコントロールするだけではなく、キャンパス形成の歴史をふまえて現在の建築を理解できるような本をつくるべきではないかということを考えました。そうしてみなさんの賛同を得て、『東京大学本郷キャンパス』という本ができたわけです。というのも欧米の歴史ある大学には、建物の歴史やキャンパスの歴史を書いたアカデミックな本があります。他方、東京大学の場合は案内本はあったのですが、建物そのものあるいはキャンパス計画を紹介した本格的な本はありませんでした。

この本をまとめるためにキャンパス計画室のメンバーを中心として、編集のワーキンググループをつくりました。制作には、約三年かかりました。中心的にやっていただいたのは、尾崎信(松山アーバンデザインセンターディレクター、愛媛大学講師、芝浦工業大学非常勤講師)さん、森朋子(札幌市立大学デザイン学部准教授)さんという当時、助教の先生方で、ふたりとももう偉くなってしまいました。

本日の講演で私は、このシンポジウム全体のイントロダクションを兼ねて、本郷キャンパス計画の変遷を簡単に紹介したいと思います。ご承知のように、東大の諸学部は都内各所から本郷に移ってきました。では一体なぜ本郷だったのか。まず、この問いがポイントになります。そしてその後、東大は

土地を買い足し、少しずつ校地を広げてゆきました。この敷地拡張もキャンパスを語る上で重要なところですよ。

本郷キャンパスの出発：なぜ本郷か

まず、なぜ本郷か、ということから、お話ししてゆきましょう。本郷のこの土地²は1871年に前田家から新政府に上地されました。ごく一部、一割程度を前田家が再度もらい受けましたが、それ以外のところは国有になっていたわけです。そして加賀藩邸の大半は1868年に火事で焼けてしまっていました。そこで1874年にこの地へ東京医学校が移転することに決まりました。

加賀藩邸時代の様子について当時の図面³をもとに説明しましょう。実は、本郷の前田藩邸は最初下屋敷で、その後上屋敷に移行しています。今から四百年ほど前の1617年ごろに下賜されたという記録があります。現在から見ると赤門が当時の正門のように考えてしまいがちですが、実際は別に表御門という門が、赤門の南側にありました。赤門は1828年に溶姫を迎えるときにつくった別の門なのです。現在、表御門の位置には門がありません。このように建物の構成は非常に大きく変化したわけですが、加賀藩邸時代の図面に記されたもので現存するものもいくつかあります。第一はもちろん赤門です。ただ、赤門は位置を十五メートルぐらい西に動かしております。第二に育徳園もあります。第三に、非常にユニークなものとして、龍岡門からバス通りあたりに当時の土地割りと道路が残っています。

東京大学埋蔵文化財調査室の堀内秀樹先生からお聞きしたことです⁴。江戸時代以来、本郷キャンパスの敷地は造成を続けています。三四郎池から谷がありまして、水が弥生門側に抜けていました。さらに細かい谷もありました。そういうものを埋めながら御殿の敷地をつくってゆきます。つまり、ご承知のように現在でも本郷通り側が尾根筋で、バス通り側へ斜面で降りて

2 東京大学キャンパス計画室編 [2018：9]「小石川・谷中・本郷絵図」。

3 東京大学キャンパス計画室編 [2018：17]「育徳園と御殿」。

4 東京大学キャンパス計画室編 [2018：10-11] 参照。

っていますが、斜面の土を造成しながら、現在の高さまで埋め立てたわけです。バス通りと御殿下グラウンドに高低差があるのは、江戸時代の土地造成の結果なのですね。バス通りの形状も藩邸時代の図面のままですので、恐らくこのあたりが一番古くからの形状を保っている土地と言えるでしょう。

この加賀藩邸跡地への移転について森さんが調べてくれたことがあります。大学東校（本学医学部の前身）は神田和泉町の、現在の三井記念病院のところにありました。定説によると、それが上野に移転される計画が一旦出たものの、上野は病院ではなく公園とすることになった結果、本郷に移ってきたと言われています。しかし実は、上野に大学の土地を取得する許可が1873年に下りています。さらに東校に南校（本学法・理・文学部の前身）も合流させた大学を上野公園につくる計画の図面が一敷地を赤線で書いただけのようなものなのですが一出てまいりました⁵。ちょうど今の噴水があるあたりの、上野公園の中心部分が大学用地として許可され、文部省の土地になっていたということです。つまり、必ずしもすぐに上野移転計画を諦めたわけではなかったようです。

この上野移転計画は、なぜ実現できなかったのでしょうか。おそらく予算の問題があったことに加え、上野は1877年の第一回内国勸業博覧会の会場になっていることからして、そちらの計画が優先されたのでしょうか。かくして、本郷が大学用地となりました。

さて、東大の施設部には古い時代からの図面やそれぞれの建物の資料がかなり残っています。今回の『東京大学本郷キャンパス』は、本学140周年記念という位置づけでキャンパス計画室が編集しましたので、施設部の収蔵資料を閲覧することができました。この閲覧を通じて、いろいろなことがわかってきました。

これは東京大学の一番古い時代の平面図で、1880年のものです（図2）⁶。

5 東京大学キャンパス計画室編 [2018: 31] 「大学東校上野移転計画図」。

6 東京大学キャンパス計画室編 [2018: 35] 「東京大学医学部全図」も参照。

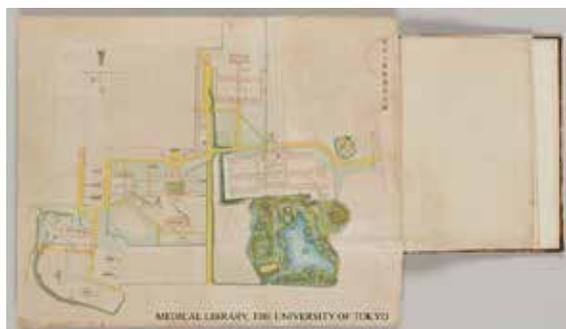


図2 「東京大学医学部全図」『東京大学医学部一覽 明治 13-14 年』所収,
所蔵・画像提供：東京大学医学図書館

鉄門の前に医学部の本館があり、現在はかつての医学部本館があったところに病院の外来棟が建っています。ちなみに、現在の鉄門は近年復元されたもので、当時とは場所が少しずれています。そして現在の本部棟のところに最初は寄宿舍、その後は内科の病院がありました。さらに現在の池之端門よりのところに教場があって、その周囲に外国人教師の住宅がある、という配置でした。

なぜこのような建物配置になっているのでしょうか。実は当時の医学部の敷地は、加賀藩の支藩だった大聖寺藩のところなのです。加賀藩側は火事で大半が焼けていましたが、大聖寺藩側は建物が残っていました。それらの建築物をそのまま教場として利用できることが、当時の建物配置の前提になっていたと推測されます。

大聖寺藩の御殿は後に移築され、山上御殿という名前となります。それが関東大震災で焼けてしまって、今の山上会館となるわけです。そして御殿下グラウンドは、その山上御殿の下に位置することにちなんで名付けられたわけです。モノは残らなくとも、地名に歴史的名辞が残っていることになりませぬ。

医学部本館⁷は、後に前方部分が赤門付近に移築され、さらに小石川植物園

7 東京大学キャンパス計画室編 [2018: 37] 「東京医学校本館」.

に再移築されています。これは現在、国の重要文化財となっています。もとの建物には立派な時計塔が付属していましたが、現在は失われています。

さらにこの当時の名残が現在のキャンパスにあります。病院をつくったときに塀として植えたケヤキがそのまま育ち、現在ケヤキの並木になっています。薬学ゲートから坂を上がって、北側に医学部の二号館、南側に薬学部の建物があるところのケヤキ並木です。

1883年の迅速測図五千分の一原図⁸にも、先ほどの地図と同じような配置が書かれています。医学部の本館、鉄門、病院、寄宿舍、教場、教師館があります。そして北側（現在の正門側）のあたりに、教師館と音楽取調所があります。この音楽取調所が東京音楽学校の前身になります。この時代の建物配置が、本郷キャンパスの出発点になります。

関東大震災までのキャンパス計画

そして1886年に帝国大学が発足しますと、病院スペースを増設するという非常に大きなニーズが出てきましたので、それまでの寄宿舍部分（現在の本部棟付近）を病院に変えます（図3）⁹。ですが、当時の医学部の学生は半分以上が地方から出てきていたものですから、寄宿舍が必要でした。そこで、別に寄宿舍が置かれました。

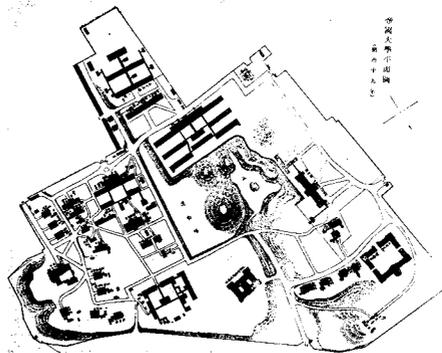


図3 「帝国大学平面図（明治19年）」

所蔵・画像提供：東京大学施設部

この段階で、赤門のほかに仮正門がつくられます。仮正門は本郷通からのメインのアクセスルートで、後にそのまま正門になります。その場所は、現

8 東京大学キャンパス計画室編 [2018: 43] 「1883年頃の本郷キャンパス」。

9 東京大学キャンパス計画室編 [2018: 73] 「1886（明治19）年の構内配置図」も参照。

在までほとんど変わっておりません。この段階では、法文の建物ができ、さらに理科大学，工科大学，教師館もありました。これらは一つ一つ前庭を持った，非常にのどかな建物で，軸線がそろっていることもありません。デザインは，ゴシックがメインでしたけれども，それぞれ設計者が違っており，必ずしも統一されていたわけではありませんでした。歴史的なものを転用した木造の建物と，近代的な煉瓦造のものが混在していました。

その後も少しずつ建物が建て続けられました。1894-95年段階の構内配置

図（図4）では図書館ができています。この旧総合図書館は，1892年に竣工しました。そして，法文の建物ができま

すが，この建物は本郷通り側に正面を向けています。ですから当時は，仮正門から入ったところに横長の法文の建物が建っており，その手前に広場があったわけです。そして工科大学本館が仮正門から入って左手に，旧図書館が右手にあり，両者は左右対称に位置していました。このような経過からは，仮正門前に一つの大きなスクエアをつくってゆこうとしていた意図が伺えます。

1896-97年の図面（図5）¹⁰



図4 「(1894-95年段階の構内配置図)」

所蔵・画像提供：東京大学施設部

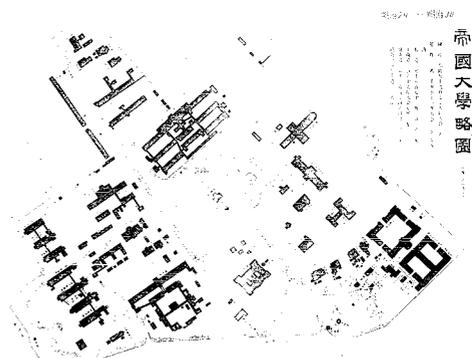


図5 「帝国大学略図」

所蔵・画像提供：東京大学施設部

10 東京大学キャンパス計画室編 [2018：73]「1896-97（明治29-30）年の構内配置図」，および「1897（明治30）年のキャンパス」（同書106）も参照。

で、初めて「仮正門」の名称が確定し、その後さまざまな道がつくられてゆきます。そしてこの段階で、仮正門前のスクエアがはっきりと形成されました。また、現在も正門と安田講堂を結んでいる、直線の道がつくられたのがわかります。

このキャンパス設計に見られる変化には、濱尾新が非常に大きな役割をはたしていたと思われます。濱尾新は、総長を第三代（1893-97年）と第八代（1905-12年）、合計十一年間務め、後に文部大臣となりました。彼は非常に土木・庭いじりが好きで、土木総長と呼ばれています。濱尾総長は先ほど述べた道をつくったほかに、自分でヒマラヤスギを植えたりしました。現在、東大の方々に植えられているヒマラヤスギは、濱尾総長が植えたものと思われます。さらに農学部の先生と相談しながら、イチヨウ並木も提案したようです。そして、最終的には現在の位置に大講堂をつくることも彼が構想しました。

シンポジウム冒頭で鈴木先生が言及された写真（前掲図1）は、この当時のものです。左右に分割して撮影した写真二枚を横にパノラマとして並べているので、双方の撮影角度は45度離れています。正門から向かって左から、工科大学、理科大学、法科大学、旧図書館が正門側を正面にして建っています。中央の道の右側に沿って、手前の建物の裏にコンドル¹¹が設計した法科大学の建物が並んでいました。さらに、中央の道の軸線を大事にしつつ、その奥に大講堂をつくる計画があったこととなります。この写真の建物は大半が震災で失われてしまうのですが、近年、図書館前広場の地下に書庫を建築した時、旧図書館の基礎が出土しました。これは後ほど紹介したいと思います。

1900年から、徐々に建物が建て詰まってきます。特に医学部のほうで顕著です。そのためこの後、東京大学がそれぞれの学問の分野を融合する「ユニバーシティ」であることを正門前広場によって体現するデザインが維持できなくなってゆきます。

11 Josiah Conder. 1852-1920. 英国の建築家。1877年来日。工部大学校造家学科の教師として教育にあたりつつ、工部省に属して政府関係の諸施設の設計を行った（日本大百科全書）。

そして、大正元年から2年ごろ正門ができて上がります(図6)¹²。よく見ると、現在の工学部十一号館、十四号館が建っているところの民有地を買収し、それと同時に正門を整えたようです。この正門のデザインは冠木門風の和風のものでしたが、和風にこだわった



図6 「(大正 2-3 年段階の構内配置図)」

所蔵・画像提供：東京大学施設部

のは濱尾総長のです。彼の意見をもとに建築の先生が実際にデザインしました。ですが、東大の建物が和風ではなかったために、和風デザインがふさわしいかどうか、当時議論になったようです。

この段階はほぼ建て詰まった段階で、法文の建物と法科大学の八角講堂もできて上がって、当初の計画の大半が完成しました。この段階の少し前に、医学部が移動しています。医学部はもともと現在の病院の位置に本館があって、病院が現在の医学部の位置にありました。この医学部と病院の位置を1893年から入れ替えました。東大医学部は今でも基礎を山の上、臨床を山の下と呼び、はっきりと分かれています。この仕組みは移転の過程で生まれたわけです。この移転の過程の1911年に、鉄門付近にあった医学部本館の前方部分が赤門前に移築されます。このとき赤門付近に医学部の建物を増築することになったので、おそらく赤門が少し前—現在の位置—に移動したのでしょうか。

¹² 東京大学キャンパス計画室編 [2018: 73] 「大正元-2年の構内配置図」も参照。当日は、その一年後の図面が投影された。

この図面は1923年の関東大震災直前に描かれたものです(図7)¹³。この図面から、震災直前の段階で既に正門前スクエアをつぶす計画が始まっていたことがわかります。これは内田祥三¹⁴先生がつ

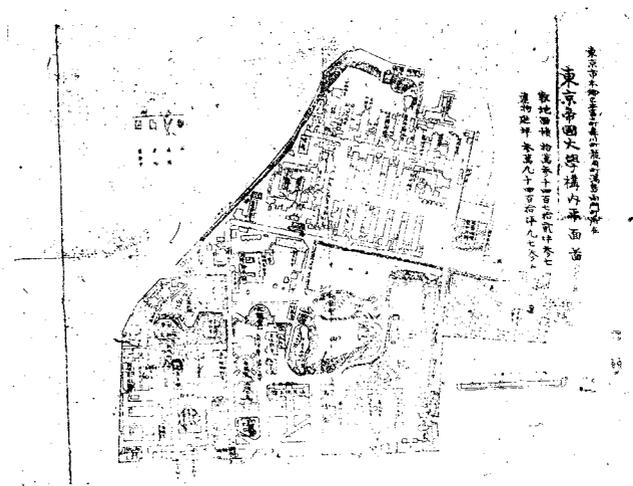


図7 「東京帝国大学構内平面図」

所蔵・画像提供：東京大学施設部

くったもので、今の列品館が計画されました。また大講堂（安田講堂）も計画されています。

安田講堂は安田財閥から急遽寄附の申し出があってつくられることになるわけですが、先ほど申し上げましたように、建築位置がほぼ決まっていた。ちょうど尾根から下りるところに建設する非常に巧みな計画で、大講堂は正門側からは三階に入るのですけれども、後ろからは一階に入るわけです。ですから、二階分の高さの差を建物の中で調整することになります。内田先生の速記録¹⁵には、大講堂予定地の横にコンドルが設計した法科大学の建物が建っていましたので、それを何とか活かして大講堂を建築したい、という意向が書かれています。

したがって、賛否両論もあったようですが、この段階ですでに正門前

13 東京大学キャンパス計画室編 [2018:87]「1923(大正12)年の構内配置図」および「1923(大正12)年のキャンパス」(同書128)も参照。

14 内田祥三。1885-1972。建築家。日本の草創期鉄筋コンクリート建築の権威。1921年東大教授。1943年総長(日本人名大辞典)。

15 内田述 [2002:65]。

広場をつぶすことになっていました。内田先生が書かれた図面は現在、東京都公文書館に内田文庫として残されていますが、その中の1923年5月4日つまり同年9月1日の震災直前に描かれた図面（図8）に、広場をつぶして列品館と法三号館を建てることを計画した絵があります。この計画は、その後実現しました。

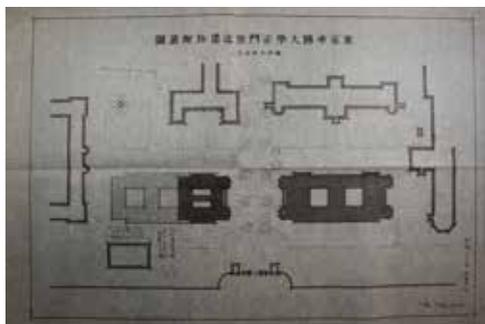


図8 内田祥三「東京帝国大学正門附近建物配置図」所蔵・画像提供：東京都公文書館

ただし当時は、列品館を法三号館と同じ大きさに、工学部一号館側へ向けてもう少し増築する計画になっていました。現在の列品館は、その第一段階として建てられたもののようです。ですから、もしもこの計画が実現していると、工学部一号館前の広場がなくなっていたでしょう。工学部の方はよくご存知だと思いますが、列品館に工学部一号館側から入るとどこが入口かわかりにくいですね。恐らくもともと中庭に面したところとして建築されたもののへ、のちに表側の衣装をつけたのでしょう。

なお、この段階では明治20年代建設の図書館がありましたので、法三号館が建ってしまった結果、図書館前の広場がなくなり、窮屈になってしまっています。ただし、工学部一号館と図書館をつなぐ道をつくり、それに交差する正門と大講堂を結ぶ道をつくって、十字にするという計画が明確に描かれています。ですのでこの段階で、広場型のスクエアを持ったキャンパスから街路を軸にするキャンパスに変えるというイメージが、既にあったのだらうと思います。当時の計画のパーズには¹⁶、手前左に列品館、手前右に法三号館が描かれています。法文一号館、二号館はまだ古い建物が残っていて、正面奥にぼんやりと安田講堂が建っており、イチョウの並木があります。

16 東京大学キャンパス計画室編 [2018: 101] 「配景図」。

震災復興と内田ゴシック

この設計の直後に震災に遭いました。震災後の配置図（図9）を見てみると、被災した建物がなくなっているのが、正門付近から赤門付近にかけてがらんとしています。このあたりの建物は大きく被災したので、取り壊されたわけです。

震災後には内田先生のプランが採用されることとなります。その理由は、内田先生が設計し、震災前にほぼ完成していた工学部二号館と列品館が、鉄筋コンクリート製だったため被害を受けなかったからです。ほかの建物が甚大な被害を被った中で内田先生の設計したものに被害がなかったということが、内田先生のプランが採用される一つの大きな動機になったと思われる。

震災後に次々と建築が進められます。1932年の構内配置図（図10）に、今の法文一号館・二号館・図書館団地が少しずつつくりだされてきました。図書館前のロータリーもできてきます。工学部一号館・

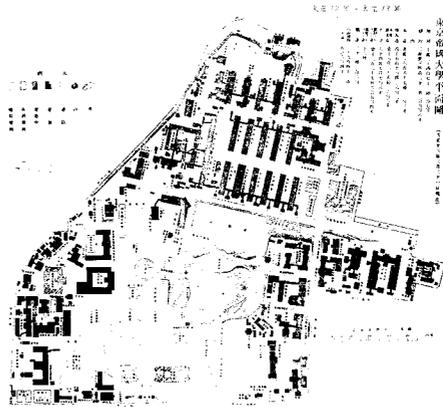


図9 「(1923-1924年配置図)」

所蔵・画像提供：東京大学施設部

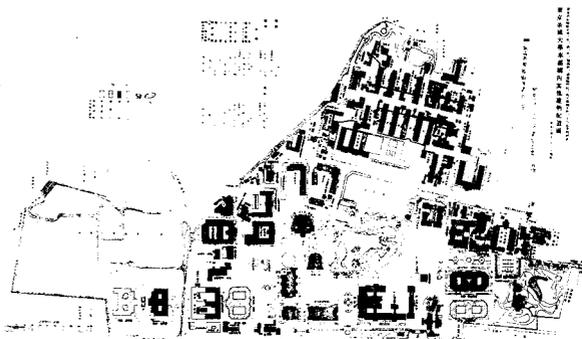


図10 「(1932年の構内配置図)」

所蔵・画像提供：東京大学施設部

理学部二号館・医学部一号館も新たに作られています。もともと震災以前には、東大に赤門から入って右側の敷地はありませんでした。この段階で、懐徳館前の土地を取得し、懐徳館側に向かう道に沿って左右対称の建物をつくるという計画が進められました。ただ病院のほうには、まだ木造建築が残っていましたが、徐々に研究棟のほうから建て替えが進んでゆきました。

さて総合図書館前噴水には、震災後に深さ約十メートルの水槽がつくられていました。震災のとき図書館が火事になりましたので、防火のためにつくられた設備だと言われています。今回の総合図書館改装にあたり、図書館前広場の地下を掘削することになりました。

まずは噴水の東西両方にあったクスノキ¹⁷を移植しましたが、枝を切って根回しをするだけで二年がかりでした。こういう巨大な移植は今、ほとんど行われていないということで、何日間もかかりました。関東一円の造園屋さんがほとんど見に来たという事です。全体的に枝を切りましたので、少しみっともない形になっているのですが、ちゃんと活着してくれたということです。移植先は、医学部二号館の両側で、百三十周年記念でオープンになっていたスペースです。二本ペアでクスノキを植えられるところは、ここしかなかったのですね。もちろん、キャンパス計画室の了解を得て移植しました。

その後、地下四十七メートルぐらまで掘る計画でしたから、まず埋蔵文化財調査室の発掘調査が入りました。この際に、先ほど言いました十メートルの防火用貯水槽が出てきました。上のピンコロ石を全部取って柏まで移送して保存し、後で水煙のある噴水を一水深はごく浅いのですけれども一復元しました。当初は噴水をなくす計画でした。ですが図書館前に噴水があるのは、その水で図書館の火事を防ぐという意志から採用されたデザインであることがわかりましたので、その精神を活かそうとしたのです。

この発掘の過程でわかったことがあります。埋蔵文化財調査室によれば、この図書館前広場からは1892年に竣工した旧図書館玄関の基礎と、江戸時

17 東京大学総合研究資料館特別展示実行委員会編 [1988: 152-153].

代の溶姫御殿と御用人住宅の間の水路とが出土しました。つまり江戸時代の水路、明治半ばの図書館基礎、大正から昭和の初めにかけての貯水槽というように、各時代のものが重層的に埋まっていたわけです。これを全部残すために、まず水路は床面に表すような形にしようと試みました。あまり凹凸をつけると危ないので石材を薄くスライスしまして、床面に埋め込んで平面表示しました。また旧図書館入り口の基礎をベンチにしました。基礎をすべてベンチにすると通れなくなりますので、部分的に復元して残しています（後掲図28, 29, 38）。

さて、噴水の位置を見ますと、コの字型に旧図書館入り口があった場所によく収まっていました。なおかつ噴水の軸線は、旧図書館とも、現在の総合図書館ともそろっています。ですから、図書館の建物は変わっていますが、旧図書館時代からの南北軸が保たれていると言えるでしょう¹⁸。

一方、クスノキを移植した医学部二号館前ですが、移植前のところを掘ると、病院時代の建物の基礎が出てきました。これは残念ながら、移植に際し破壊されました。

もう一度1923年震災直前に描かれた配置図を見てみましょう（前掲図7）。興味深いことに、この図面の痕跡が現在も残っています。例えば、元来は正門から工科大学一号館に行くためのものだった斜めの道が、道の上に列品館が建てられていながら残っています。この道が現在もあるのですね（図11）。工学部一号館前の大きなイチョウから発した道は、東の安田講堂側に向かうものは広場の角に向かっています。ですが、もう一本の道は広場の角ではなく、列品館の敷地にぶつかっています。これはもと仮正門—後の正門—に真っ直ぐ通じていた道でした。再整備にあたってここは古い道のままいじらないようにしました。

さて、震災後に内田先生と岸田日出刀¹⁹先生が中心になって描かれた構想

18 東京大学キャンパス計画室編 [2018] 表紙の写真は、この軸線に沿って撮影されている。

19 岸田日出刀。1899-1966。建築家。安田講堂などを設計した。1929年東大教授（日本人名大辞典）。



図11 「工学部一号館前広場」撮影：HMC事務局

図も残っています²⁰。この図には、内田ゴシックの建築物群が建つということまで描かれています。この図に描かれた建物のうち正門・列品館・法文一、二号館・法学部三号館・工学部一号館・安田講堂が登録有形文化財になっています。

これは1939年の構内配置図です（図12）。1935年に農学部が一高と場所

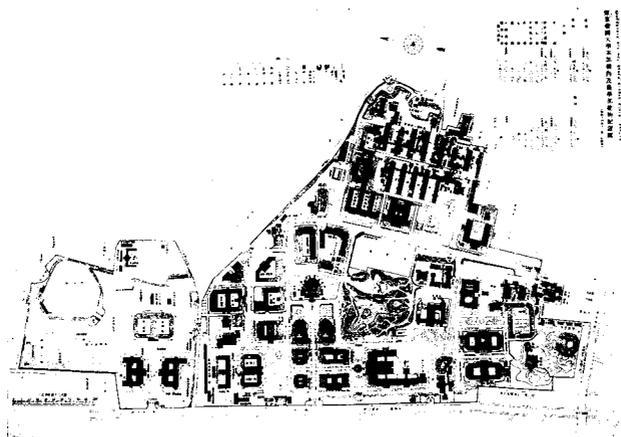


図12 「(1939年の構内配置図)」

所蔵・画像提供：東京大学施設部

20 東京大学キャンパス計画室編 [2018：112-113]「東大本郷構内構想図」。

を交換して、移転してきますが、農学部が描かれています。ちょうど同じ時期に前田家の懐徳館の土地と、現在の駒場の教養学部北側の駒場第二キャンパスまでの土地を交換しました。懐徳館は、戦前には総長の宿舍として使われていました。

戦前最後に描かれた1942年の構内配置図を見ると、ほぼ今の状況と変わらないということがわかりになると思います。ただ戦後の構内配置図を比べると、本郷キャンパスはそれほど戦災に遭っていませんが、懐徳館などが焼失しています。戦後は2002年まで少しずつ建物が建て詰まって行きました。

国立大学法人化とキャンパス計画室の再編

2002年の段階で、建物の建て詰まり問題が顕著になってきました。特に医学部や理科系の建物は研究スペースが不足し、高密化が問題になってくるのです。同時に2004年の国立大学法人化以降、寄附で研究棟を建ててよいことになり、建築ラッシュが始まります。

それらの建築をコントロールするために、さまざまな計画が立てられました。2009年にはキャンパス計画室を再編・再設します。初代の「新」キャンパス計画室長は内藤廣先生です。当時の本郷キャンパス計画案では、南北を貫く空間軸があって、それに幾つかのオープンスペースがぶら下がっているのが主軸、そこにさらに副軸がある、という空間を構想しました。

そして歴史的な建物を認定しなおし。歴史的な重要性が高いものは1種、歴史性が薄いのは2種として、歴史的なオープンスペースと守らなければならない景観も設定しました²¹。そして高層地区と密度による幾つかの規制をかけました。

さらにエリアコードをその密度に応じてかけました²²。プロセスがやや複雑なのですが、四つのエリアを指定してAからDのエリアコードを与え、そのエリア内の建築について施設部だけでチェックするもの、本部でもチェックするもの、キャンパス計画室でもチェックするもの、理事会マター、総長が

21 東京大学キャンパス計画室編 [2018: 167] 「歴史的空間と保存建造物」。

22 東京大学キャンパス計画室編 [2018: 167] 「キャンパス計画要綱の運用指針」。

確認するものというように段階づけました。ですから、エリアコードAという一番中心部分の建築は総長の確認までゆきますし、そうではないものも違うレベルで議論ができます。しかも基本構想の段階でチェックをして、基本設計の段階でチェックをして、実施設計の段階でもう一回チェックをするというように、何度もチェックをする仕組みが確立しました。

具体的にエリアコードA, B, C, Dの箇所では何をチェックするのでしょうか。例えば一番厳しいエリアコードAでは、新築、新造、改築、取り壊し、改修、高さの緩和、規制の緩和、プランの緩和も全て総長確認です。それ以外のB, Cになると、少しずつ緩められてゆきます。現在のキャンパス計画室では、このエリアコードを基準に具体的な計画それぞれについて毎月審議しています。

私からのお話は以上です。今すぐに聞いておきたいご質問などはありますか。

(フロアより、総合図書館前噴水のデザインは誰の発案によるものか、という趣旨の質問を受けて)

○西村 濱尾総長が和風のシンボルをつくるべきだという議論の中心になっていましたので、図書館前噴水の方針も立てた可能性が高いと思います。一方で、現在に残るデザインを実行した人は調べてみなければわかりません。

○鈴木 西村先生、ありがとうございます。続いて、藤井先生のご発表に進みたいと思います。